勧衆偈（かんしゅうげ）

蓬茨祖運（ほうしそうん）
蓑輪秀邦（みのわしゅうほう）補訂

目次

はじめに……1

一、道俗時衆等　道俗時衆等、
各発無上心　おのおの無上心を発せども、
生死甚難厭　生死甚だ厭いがたく、
仏法復難欣　仏法また欣いがたし。……4

二、共発金剛志　共に金剛の志を発して
横超断四流　横に四流を超断し、

願入弥陀界　弥陀界に願入して、
帰依合掌礼　帰依し合掌し礼したてまつれ。……7

三、世尊我一心　世尊、我、一心に、
帰命尽十方　尽十方
法性真如海　法性真如海・……10

四、報化等諸仏　報化等の諸仏・
一一菩薩身　一一の菩薩の身・
眷属等無量　眷属等の無量なる・
荘厳及変化　荘厳および変化・……13

五、十地三賢海　十地・三賢海・
時劫満未満　時劫の満ちたまえると満ちたまわざると、
智行円未円　智行の円なると円ならざると、
正使尽未尽　正使の尽きぬると尽きざると、
習気亡未亡　習気亡ぜると亡ぜざると、
功用無功用　功用と無功用と、
証智未証智　証智と証智せざると、……16

六、妙覚及等覚　妙覚および等覚、
正受金剛心　正しく金剛心を受け、
相応一念後　相応一念の後の

果徳涅槃者　果徳涅槃者に、帰命したてまつる。……20

七、我等咸帰命　我等ことごとく、
三仏菩提尊　三仏・菩提尊に帰命したてまつる。
無碍神通力　無碍の神通力、
冥加願摂受　冥に加して、願わくは摂受したまえ。……23

八、我等咸帰命　我等ことごとく、
三乗等賢聖　三乗等の賢聖の、
学仏大悲心　仏の大悲心を学して、
長時無退者　長時に退することなき者に帰命したてまつる。

請願遙加備　請い願わくは、遙かに加備したまえ。……26

九、念念見諸仏　念念に諸仏を見たてまつらん。
我等愚痴身　我等愚痴の身、
曠劫来流転　曠劫よりこのかた流転せり。……29

十、今逢釈迦仏　今、釈迦仏の、
末法之遺跡　末法の遺跡、
弥陀本誓願　弥陀の本誓願、
極楽之要門　極楽の要門に逢えり。……33

十一、定散等回向　定散等しく回向して、
速証無生身　速やかに無生の身を証せん。……37

十二、我依菩薩蔵　我、菩薩蔵・
頓教一乗海　頓教・一乗海に依りて、
説偈帰三宝　偈を説きて三宝に帰したてまつる。
与仏心相応　仏心と相応す。……39

十三、十方恒沙仏　十方恒沙の仏、
六通照知我　六通をもって我を照知したまえ。
今乗二尊教　今、二尊の教に乗じて、
広開浄土門　広く浄土の門を開く。……43

十四、願以此功徳　願わくは、この功徳をもって、
平等施一切　平等に一切に施して、
同発菩提心　同じく菩提心を発して、
往生安楽国　安楽国に往生せん。……47

あとがき……53

凡例

一、偈文ならびに書き下し文は『真宗聖典』（東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部））によった。

一、漢字は原則として通行の字体にあらため、読みやすさを考慮して、漢字をひらがなに、またひらがなを漢字にするなどした。

一、脚註は初出の箇所に付して、二回目以降の場合、初出の箇所を参照できるようにした。

〔例〕（本文三五頁）回向　→㉘を参照。

一、『真宗聖典』からの引文については、文末に「聖典〇〇頁」と表記した。

はじめに

玄義分

善導大師①の『観経疏』は玄義分、序分義、定善義、散善義の四帖にわかれています。その玄義分は、『観経』②の奥底の心を明らかにして、大師以前の有名な仏教学者の異解③を正されたものであります。これによって仏の円満なさとりの教えが、私たち凡夫の唯一の救いとして大きく開かれていることが明らかになりました。まことに遠く歳月をへだて、国をへだててはおりますが、深く大師のご恩を感謝せずにはおれないのであります。

その玄義分のはじめに「先ず大衆を勧む、願を発して三宝④に帰し」（聖典一四六頁）と述べられ、一句を五字、四句を一行にして、

①**善導大師**　六一三～六八一年。中国隋・唐代の浄土教の祖師。七高僧の第五祖。道綽禅師の弟子で、光明寺和尚とも呼ばれる。

②**『観経』**　『仏説観無量寿経』のこと。浄土三部経のひとつ。

③**異解**　異なった解釈。

④**三宝**　仏、法、僧のこと。

十四行の偈⑤がうたわれています。この偈を「勧衆偈」、「帰三宝偈」、「十四行偈」などと呼んでいます。真宗各派の多くの葬儀では、棺前の勤めとしてこの偈をあげています。

そこで、その心をいただいてみたいと思います。

先勧大衆

はじめに「先ず大衆を勧む、願を発して三宝に帰し」ということばがおかれています。

この「先ず大衆を勧む」とは、何をさしおいても、いそいで、今日のわれわれに勧めずにはおれないという大師の心が述べられているのであります。早く早くという切なる心があらわれています。それは、人の命は実に風前の灯のように、はかないものであるからであります。

⑤偈　仏の教えや仏・菩薩の徳をたたえた定型の詩。

先日も京都市で夫婦が自動車で勤めに出かける途中、事故をおこして命を落としてしまい、あとに幼い男の子と女の子とが身よりもなく残された記事が新聞に出ていました。いかに涙をしぼってもどうすることもできません。

しかも人の命は稀にしか得られないものです。人の命は何のためにあるのでしょう。そのいわれは、仏の教えをのぞいて求めることができないのであります。早く仏の教えに帰し、救いをいただいてほしいという心がここでは述べられているのであります。

何ものをもってしてもごまかし得ない真実を教えている死者の前で、浮わついた心をすて、真の宝である仏法に帰す心を発すよう、この偈が勤められることは実にありがたいことといえましょう。

一、道俗時衆等　道俗時衆等、
各発無上心　おのおの無上心を発せども、
生死甚難厭　生死甚だ厭いがたく、
仏法復難欣　仏法また欣いがたし。

道俗時衆等

三宝に帰依する大衆を大きく出家（道）と在家（俗）とにわけて、これを「道俗」といいます。「時衆」とは、今の時の大衆という意味であります。また無常⑥を生きるわれわれのことと受け取ってよいでしょう。無常は単に個人の老病死に限りません。産業、経済、政治に至るまで、私たちは血みどろになって争い合ってやみませんが、そうした世界に執着することの愚かさを知って、一切をすてて仏弟子となって、身心ともに苦悩のないさとりを求めるのが出家であります。また愛欲⑦名利⑧の執着が深く、それがすてられないまま三宝に帰依して、幸福を願うのが在家であります。

⑥**無常**　一瞬一瞬、生滅を繰り返し、同じ状態にとどまらないこと。

無上心

仏の教えはあまねく一切の衆生を救う教えであります。それゆえ出家をしても、一切衆生を救う心を本にしなければ仏弟子になったとはいえません。

その意味でむしろ在家こそ「資生産業皆是仏道⑨」といえるのではないか。『維摩経』⑩には、維摩居士⑪が在家であるまま、仏道を行じたとあります。

しかし、在家は愛欲名利の執着心につながれていますので、維摩居士のようにはなれません。生きることが死ぬことにつながっ

⑦**愛欲**　むさぼり求めること。

⑧**名利**　名誉と利得。

⑨**資生産業皆是仏道**　資生とはいのちを資けること。産業に従事し、人間のいとなみをすることがそのまま仏道であるという教え。

⑩**『維摩経』**　在家の維摩が主人公の経典。出家の仏弟子や菩薩が維摩に論破されていくなかで、大乗の思想を説く。

⑪**居士**　仏教に帰依した在家の男子。